「戦争のない平和な世界が訪れることを願います」

小比賀　千寿子　（８０歳）

1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日、戦争が終った時、私は 5 歳でした。兵庫県城崎郡日高町（現在の豊岡市日高町）に実家がありました。私の住んでいた地域は、都会と違って直接的な戦争被害のようなことはありませでした。実家は農家だったので、麦のいっぱい入ったご飯を食べていました。幼稚園に入園するのを楽しみにしていましたが、園舎には兵隊の荷物が入っているということで、入園はできませんでした。幼稚園のグランドはジャガイモ畑でした。私には幼稚園の思い出がありません。日高小学校入学後は、神戸の方からも転校生がいて、言葉づかいや服装等もの珍しく思っていました。

戦後一年くらいして、父が戦地である中国から帰って来ました。父の弟の叔父さんは戦死していました。子ども 5 人を育てるのに、叔母は大変苦労したと思います。両親は農業を営んでいました。猫のひたい程の田畑でしたので、生活は苦しかったと記憶しています。家族は両親と姉 2 人、弟 2 人、私との 7 人家族でした。母が荷車に野菜を積んで、街に出かけて行きそれを売って現金に換えていました。子どもたちも時々母と一緒に、野菜売りのお手伝いをしていました。小学校の教科書は姉のお下がりを使用していました。子どもたちは栄養失調ぎみで痩せていました。すぐ上の姉は、中学校卒業後すぐ働きに出てしまいました。

お酒が大好きな父は、近くの商店に「するめを一枚買ってきて」とお金を渡し、子どもたちは交代で「するめ」を買いにいきました。それを焼いて私たち姉弟5人に分け、自分もそれを「肴のあて」にしながら、戦争の体験を話してくれました。中国の人達に、大変迷惑をかけたようなことを話していました。後で振り返ってみると、反省の言葉がなかったように思えて、軍国主義の恐ろしさを身にしみて感じました。その父も64歳で亡くなりました。

今世界を見れば、戦争で悲惨なめにあっている子どもたちや女性が、たくさんいます。一日も早く平和な世界が訪れるよう願ってやみません。